

# 資料館だより

平成 14 年 (2002)

2 月 1 日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館 〒208-0004 武蔵村山市本町5-21-1 TEL 042(560)6620



女官養蚕之図 (安藤徳兵衛画, 明治17年)



開化養蚕ノ図 (揚州周延画, 明治19年)

## ミニコーナー展

### 進藤コレクションの蚕織錦絵

展示期間 平成14年2月3日(日)～3月10日(日)

市内本町にお住まいの民具収集家進藤進<sup>しんどうすすむ</sup>氏が所蔵する多くの蚕織錦絵<sup>さんしよくにしきえ</sup>の中から今回の展示では10点を借用し、紹介いたします。蚕織錦絵は養蚕、製糸、機織<sup>はたおり</sup>という産業を木版画として出版したも

のです。養蚕や機織が女性の手作業ということで美人画の構想になりやすいため描かれるようになったと考えられます。明治時代になると、物産絵、産業絵としての性格を持つようになりました。

## 武蔵村山に残る中世の道 — 山口街道雑考 —

市文化財保護審議会委員 内野 正

『武蔵村山の昔がたり』(注1)に「大ヌカリのザンザラ道」の話が紹介されている。ザンザラ道とは、かつて狭山丘陵を抜けて、所沢と福生方面を結んでいた山口街道(地区により、所沢街道や福生街道などとも称される)の横田大ヌカリ付近の呼称である。同書によると、横田から勝楽寺や所沢へ行くにはよく通ったもので、居酒屋が一軒あり、そこを通る時には、よく茶碗酒を飲んだ、という。また、横田には「ヤマグチケイドー」の屋号を持つ家もある(注2)。居酒屋や屋号「ヤマグチケイドー」に象徴されるように、ザンザラ道(=山口街道)は、山口貯水池の湖底に沈む昭和初期までは、人や物資の往来も頻繁で、沿道の人々の生活に深く関わっていた。

この街道の歴史は古い。沿道にあった勝楽寺(旧勝楽寺村)は鎌倉時代には十二坊を有する大伽藍で、江戸時代にも大坊に延久3(1071)年の銘を持つ鐘があったという(注3)。勝楽寺という大寺院の存在とその歴史は、この地が平安末期から鎌倉時代の頃までにはすでに切り開かれており、この街道も通じていたことを十分に伺わせる。

室町時代になると、この街道の存在はいつそう明確になる。その証左となるのが、勝楽寺村にある根古屋城跡である。根古屋城は舌状の丘陵尾根を利用して築かれた山城で、現在でも曲輪や土塁、空堀が良好に遺存する。南麓を山口街道が走り、沿道には「馬場」という字名があった。この城は山口氏系図によれば山口小太郎高忠が明徳・應永の頃に築き、後に北条氏康の攻撃により落城したという(注4)。山口氏は村山党に属し、代々山口郷(所沢市山口に比定。狭山丘陵の柳瀬川流域の地)を所領とし、山口城(所沢市山口)をその居館としていた。根古屋城は山口谷の奥で、南麓を走る山口街道を扼するように立地しており、山口城の支城として、村山や宮寺方面からの山口谷への侵入者を監視あるいは阻止することを意図して築かれたのであろう。根古屋城の築城は、まさしく街道の存在が前提となっている。

さて我が市域に目を転じ、山口街道との歴史的関わりについて、二・三私見を述べたい。

「歴翁夜話 渡邊美和翁郷土歴史雑話」(「村山町史編纂資料」(注5)所収)という、郷土史研究の先達である渡邊美和翁からの村山の歴史や伝承についての聞き書きがあり、その中の「戦い山」(横田)の項に興味深い記載がある。それは「里人が言うのには

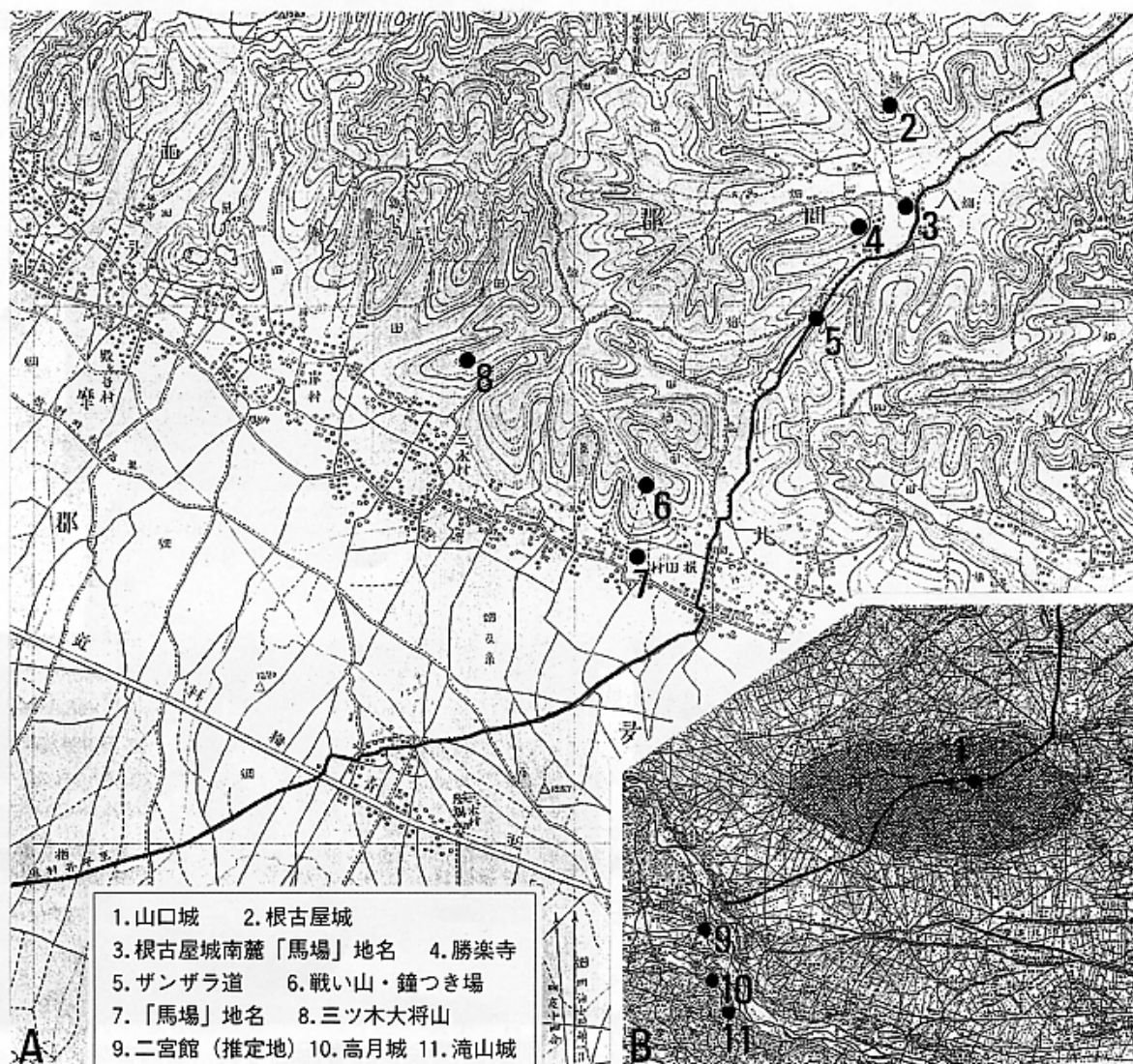
滝山城で鐘を打つと、それを横田で受け継ぎ、それがまた山口へ行って椿が峰で継いで、それからむこう奥州の白河まで連絡したということを行っている者がある。その戦い山の平地に鐘つき場という地名は残っているが、常識から判断して滝山で鳴らした鐘が横田まで聞えたという事は信じられない。」という伝承である。内容全てを歴史事実として信用するわけにはいかないが、横田付近がある種の連絡網の中継地点として語られていることは注目に値する。ここで想起されるのは、横田の南西の「バンバ(馬場)」と言う地名である。この地名については、村山党の居館に付属する馬場に由来するという説もあるが(注6)、私は「バンバ」=「番場」=「見張るために番をした場所」と考え、さらに先の「戦い山」・「鐘つき場」と有機的な関連性を持たせ、横田付近に何らかの軍事的行動に対する危急の連絡網の存在があった、と想定したい。このことについてはさらに地域を広げて、当時の状況を考えると、いつそう信憑性を帯びる。先ず山口街道を所沢に出、北上すると河越城にいたる。河越城は上杉氏と後北条氏との間で、激しい争奪戦が行われたことから解るように、この地域では政治的・軍事的に重要な拠点であった。一方、横田から福生に出ると、二宮館・高月城・滝山城など、大石氏や後北条氏の拠点に至り、さらには甲斐や相模方面にも通じている。狭山丘陵はこの南北両拠点の中間に障壁のように位置しており、その谷間を抜けているのが山口街道であることを考えれば、この街道の重要性は自ずと納得される。南北両拠点の関係が友好・敵対いずれの場合であっても、この街道沿いに何らかの連絡施設があっても不思議はない。二宮館・高月城・滝山城⇔バンバ・戦い山・鐘つき場⇔根古屋城(馬場)⇔山口城⇔河越城といった連絡の図式も成り立つかもしれない。

市域の数少ない中世の記事として「太田道灌村山の陣」がある。太田道灌は文明九年(1477)、長尾景春の乱の際に、村山に陣を構え、甲州境まで攻めたとされる(注7)。この「村山の陣」の比定地として、中藤の真福寺と三ツ木の大将山が当てられているが(注8)、山口街道の存在を考慮すれば、その沿道に近い「大将山」説の可能性が高い。実際、大将山から福生方面に延びる街道は、何の遮蔽物もなく一望することができ、布陣するのに適している。「大将」を太田道灌と結び付けることもあながち否定はできない。

山口街道は市内「中藤」の地名の由来についても再考の余地を与えてくれる。「中藤」が「中通り(ナカドオリ)」から転化したと考えるのは(注9)、ほぼ妥当であろう。ただ、その「中通り」に該当するのはどの道か、と言う点について、私は目下、山口街道ではないか、と考えている。元来、狭山丘陵付近を南北に通じる道は、主に三本存在した。一本は丘陵西端、箱根ヶ崎を通る道で、江戸時代には日光街道として整備された。そして一本は丘陵東端、八国山付近を通る道で、古代には東山道武蔵道が、中世になってからは鎌倉街道がそれに代わった。そして、もう一本が丘陵の中を抜ける山口街道である。この道が東西の道に対して中の道＝中通りと認識され、呼称されていたのではないだろうか。室町時代に政治的・軍事的に重要な道であったことは既に触れたとおりで、それが地名として定着したと考えたい。山口街道の通過する横田の谷が、江戸時代前半に横田村として立村するまでは、中藤村であったことも、山口街道が「中通り」の傍証となる。

推測に拠る部分も多いが、沿道に残る遺跡や地名、伝承から山口街道と武蔵村山市域との歴史的な関わりについて私見を述べた。最後に山口街道とその沿道を基軸とした歴史研究が、本市の希薄な中世史に一筋の光明を与えてくれる可能性があることを指摘しておきたい。

- (注1) 武蔵村山市教育委員会 1990『武蔵村山の昔がたり』武蔵村山市文化財資料集八
- (注2) 武蔵村山市教育委員会 1992『武蔵村山の昔がたり』武蔵村山市文化財資料集十
- (注3) 齋藤鶴磯『武蔵野話』
- (注4) 所沢市教育委員会 1981『所沢市史 中世史料』
- (注5) 村山美春氏所蔵
- (注6) 村山町史編纂委員会 1968『村山町史』
- (注7) 武蔵村山市史編さん委員会 1999『武蔵村山市史資料編 古代・中世』
- (注8) (注6)に同じ。
- (注9) 同上
- (注10) 財団法人日本地図センター『地図でみる多摩の変遷 I』より「明治40年頃の地図」平成5年発行



山口街道関連地図〔A：横田周辺、明治15年迅速測図 B：狭山丘陵周辺(注10)〕

# 特別展『武蔵村山における戦後の文化活動』

—俳優山村聰をとりまく演劇・音楽活動— から

展示期間 平成13年10月21日(日)～12月27日(木)

一昨年の平成12年5月26日、俳優の山村 聰 さんが90歳でお亡くなりになりました。山村さんは本名を古賀寛定といい、復員後の昭和20年暮れから昭和24年までご家族、ご兄弟とともに村山村(武蔵村山市の前身)で疎開生活を送っていました。

縁があって、村の若者たちは山村さんの指導を受けて、本格的な演劇を演じることとなりました。また、若者たちは山村さんの弟古賀磐安さんの指導で音楽グループも結成しました。どちらも終戦後の、その日の食べるものにも事欠く時代のでき事で、周辺地域の中では出色の文化活動でした。

このように、村山村では疎開中の山村聰さんご一家に大きな恩恵を受けました。当館では過去に実施しました聞き取り調査で、山村聰さんと谷津

青年団の事、古賀磐安さんと村山音楽グループの事などは度々話題となっていました。また、以前に刊行しました「武蔵村山の昔がたり 一村山ことばによる口頭伝承—」にも当時の文化活動について紹介していますが、詳細な資料収集はできていませんでした。一昨年の山村さんの訃報を受けて、今回の展示では改めてこの文化活動にスポットを当て、聞き取り調査及び関連資料の収集に努めました。当時の青年たちのおふれんばかりの熱気と山村聰さん・古賀磐安さんとご家族の芸術文化活動へのご指導を顕彰するとともに孤高の人山村聰さんのご冥福をお祈りいたします。

なお、展示期間中の11月17日(土)には岩手大学名誉教授 藤原 暹 氏による特別展講演会が開催され、29名の参加がありました。



村山音楽グループ(M・M・G)によるミュージカル「北風のくれた  
テーブルかけ」出演者記念写真 (昭和23年3月)



文化クラブによる演劇「峠の茶屋」  
左が山村聰さん (昭和21年9月)



特別展講演会参加者記念写真 前列右から4人  
目が講師の藤原暹氏 (平成13年11月17日)